

【共同研究から】

ロシアのアイヌ資料調査

1995年のサンクトペテルブルグから始まった千葉大学萩原眞子教授を代表とするロシアのアイヌ資料の調査は、1999年までにサンクトペテルブルグ、2000年に極東地域の博物館の調査を行い、2001年8月のサハリンでの調査をもって終了した。6年間の調査で延べ100人を超える日本からの調査参加者が、ロシアの5都市6博物館を訪れ、その結果約4,500点のアイヌ資料の所在を確認した。

訪れた各博物館ではいずれも調査に好意的に対応していただき、資料の確認や調査票の作成とともに写真撮影を行った。

この調査に、研究センターからは古原敏弘（研究課長）と大谷洋一（研究職員）が参加した。サンクトペテルブルグにおける調査のあらましについてはこれまでも『センターだより』4、6、9、12号で紹介しているが、このたびの調査の終了をふまえ、改めて全体について報告する。

* * *

訪れた博物館と収蔵されているアイヌ資料の概要は次のとおりである。



1. サンクトペテルブルグ市
2. オムスク市
3. ハバロフスク市
4. ウラジオストック市
5. ユジノサハリンスク市

1 サンクトペテルブルグ市 1995～1999年

(1) MAE（ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館） 1,233件 約1,400点

資料の中心は、ポーランド人の人類学者B・ピルスツキーが1900年前後にサハリンと北海道で収集した約1,000点である。その他に1700年代の千島、サハリンなどでロシア海軍や、シベリア探検を行った研究者の収集した古い資料が含まれている。

ただ、MAEの資料は戦後の発掘資料など一部が未調査であり、上記の資料点数は、この調査において確認した点数である。

(2) REM（ロシア国立民族学博物館）

2,069件 2,577点

資料の中心は、V・I・ヴァシーリエフが1912年に北海道とサハリンで収集した約1,800点である。その他にピルスツキーの収集資料などが含まれる。

収蔵されている写真についてもB・ピルスツキーが撮影した120点のほか、V・I・ヴァシーリエフが資料収集時に撮影したものなど268点を確認し、複写した。

2 オムスク市 2000年

オムスク造形美術館 12点



<オムスク造形美術館>

平沢屏山^{びょうざん}のアイヌ絵12葉を確認した。E・M・ラヴレンコがレニングラード（現在のサンクトペテルブルグ）で入手したものである。画題には初見のものが含まれ、アイヌ絵の研究にとって貴重な資料が含まれている。

3 ハバロフスク市 2000年

ハバロフスク郷土博物館 23点

資料の収集者として明らかなのは、S・N・タスキ、B・バラートシだけである。後者のバラートシは、ハンガリーのブダペストの民族学博物館にその収集した資料が所蔵されている「バラートシ・パログ・ベネデク」と同一人物である。このバラートシの収集資料3点が、ハバロフスクにも残されていた（なおハンガリーにあるバラートシ収集資料については、当センターが1997年に調査と展示を行っている）。

アムール地域で収集された、アイヌ以外の民族の資料とされていたものの中には、アイヌ資料も含まれていた。

4 ウラジオストック市 2000年

アルセーニエフ郷土博物館 71点

確認できた資料はすべてサハリンでの収集資料で、半数はB・ピルスツキーの収集品である。その他の資料についても収集者、収集地、年代が記録された台帳が残されていた。一部はサハリン州郷土博物館に譲られている。

5 ユジノサハリンスク市 2000年、2001年

サハリン州郷土博物館 462点

戦前の樺太庁博物館時代からの資料と、アルセーニエフ郷土博物館からの譲渡資料、戦後の収集品が収蔵されている。樺太庁時代の資料には当時のラベルが残る資料や戦前に文献で紹介された資料などもあるが、当時の台帳などの記録はない。戦前から知られる^{よろい}鎧についても詳しい調査を行うことができ、新たに^{そり}櫛も確認した。

また、戦後のアイヌを撮影した写真についても複写を行った。

* * *

ロシア国内のアイヌ資料は、戦前の樺太庁博物館の資料以外は日本では紹介されていなかった資料であるため、当初からどのような資料が収蔵されているか期待をして調査を行った。

その結果、ロシア国内に所蔵されているアイヌ資料の特徴として、収集者、収集地や年代などのデータを伴う資料が多いこと、さらに、自国内の民族資料としてサハリンアイヌの資料を収集しており、日本には少ないサハリンアイヌ資料が多く残されていることが挙げられる。

サハリンに居住していたアイヌの人々は第二次世界大戦後、サハリンを離れ北海道などに移住しているが、戦後の混乱の中で、民具といったものまで持ち出すことができずに移住した人々が多い。そのため日本国内にもサハリンアイヌの民具資料はそれほど多くはない中では、ロシアのサハリンアイヌ資料は貴重である。

現在これらの調査結果についてのとりまとめを行っている（MAEについてはすでに刊行済み*）。それは今後、これらの資料と日本国内資料との比較などの研究の基礎資料となるものである。

* * *

ヨーロッパから始まり、アメリカ、ロシアと行われてきた国外のアイヌ資料の調査は、この調査をもってほぼ終了したことになる。

そのまとめとして、今年の11月末に札幌でシンポジウム**が計画されている。

（研究課長 古原敏弘）

* SPb -アイヌプロジェクト調査団編『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵 アイヌ資料目録』草風館、1998年

**第17回「大学と科学」公開シンポジウム
『海外のアイヌ文化財：現状と歴史』
開催日：平成14年11月29日（金）～30日（土）
会場：北海道大学クラーク会館講堂
（札幌市北区 北海道大学構内）
参加申込み：（株）クバプロ
（電話）03-3238-1689
（URL）<http://www.kuba.co.jp/>

【問い合わせあれこれ】(8)

Q：アイヌの人口の移りかわりを知ることができますか？

A：アイヌの人口については、古くは、西暦1800年ごろから文献にいくつかの記録が残っています。明治時代以降も、1941（昭和16）年までは統計が作成されています。このほか、日本統治下のサハリンでも、樺太庁によって人口統計が作成されています。いま北海道についてのみ、主な数値をこれらの記録から抜き出すと下の表のようになります。

【表：北海道内のアイヌ人口に関する統計の推移】

年	人口(人)	出典
1804(文化1)	21,697	蝦夷雑記
1854(安政1)	15,171	蝦夷家数人別産物船数牛馬其外取調帳
1873(明治6)	16,272	開拓使事業報告
1893(明治26)	17,280	北海道庁統計書
1913(大正2)	18,543	北海道庁統計書
1936(昭和11)	16,519	北海道庁統計書

『新北海道史 第9巻』より作成

ただし、これらの数値は、あくまでおおよその傾向を知る目安と考えるべきだと言われています。江戸時代のものは、幕府や松前藩の役人、または漁場の番人といった人たちが把握した範囲のもので、実際の人口とは開きがあったとされています。明治以降の統計は、開拓使や北海道庁によって作成されていますが、札幌のような都市部などへの転入はあまり把握されていないと言われており、本州などへの転居については統計が見られません。

このように数値の正確さという点で注意すべき点は多く見られるものの、人口の動きについて見てみると、例えば、江戸時代にはある程度の人口の減少が見られること（この傾向は日本海側で顕著でした）などはうかがえると思います。明治以降は、北海道全体では大きな変動は見られません。ときおり、「明治以降の同化政策でアイヌの人口は減り続けている」といったイメージの議論に出会うことがあります。少なくとも明治以降に関する限り、それは正確な把握ではありません。ただし、地域ごとに見てい

くと、大きく動いている場合もあります。端的な例として、明治初期にサハリンや北千島から強制的に移住させられた人々が、伝染病や生活環境の変化によって短い年月の間に急激に人口の減少をきたしたケースがあります。また、アイヌの人口には変動がない場合でも、移民の人口と対比してみると、十勝や釧路、上川地方などでは、1890年代ごろから移民が急激に増加し、アイヌの割合が小さくなっていくようすなどを知ることができます。

こうした昔の人口統計については、『新北海道史 第9巻 史料編3』（北海道、1980年）の中に主なものが掲載されています。この本は道内では多くの公立図書館で、道外でも都府県立などの主要な図書館で閲覧できます。ただし、上に述べたような点に十分に留意したうえで、それぞれの出典を確認し、場合によっては出典を調べなおすなどの注意が必要だろうと思います。また、当たり前のことですが、数値の上では「1」と表わされる中に、一人ひとりの暮らしのありようを想像する、といった感覚も大切だろうと思います。

* * *

なお、「現在のアイヌの人口はどのくらいか」という問い合わせもいただきますが、現在アイヌの人口についての統計的な調査は行われていません。アイヌの人口としてしばしば紹介されることがあるのは、北海道が行っている「北海道ウタリ実態調査」という調査の数字です。最近では平成11年に行われ、その結果では、全道で23,767名となっています。ただし、これは「各市町村が把握することのできた人口」で、かつ、調査に応じた人のみの数です。市町村で把握できない部分もあれば、調査に応じない人も少なくないことから、実際とは開きがあるとされています。また、これはあくまでも道内の人口です。道外各地で暮らすアイヌも多くいますが、この調査には含まれていません。道内・道外を合せた人口については、推測で数万人またはそれ以上とされています。

(研究職員 小川正人)

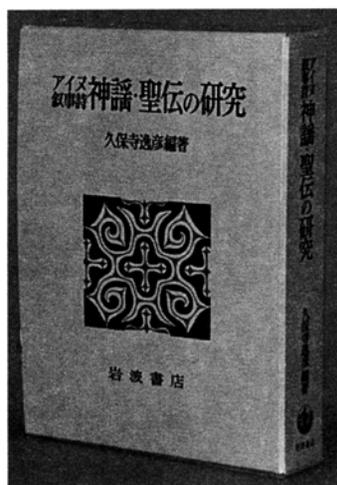
【著作紹介】

第4回 くぼでらいつひこ 久保寺逸彦 (1902~1971年)

久保寺逸彦氏は、アイヌ文学の研究や、アイヌの信仰儀礼などの民俗研究を行った学者として知られています。また、早くも1933年より当時の最新の録音機やカメラを携えての調査を行っており、アイヌ文化を音や映像で記録した貴重な資料を遺しています。

久保寺氏は、自らの調査によって得た資料を学問的に整理し分析する基礎的な作業を徹底的に行う一方、それらの理論化や文章化をいたずらに急がない着実な学風の学者でした。こうした姿勢のもとに築かれた研究は、論文として学術誌などに発表されています。その後いよいよ集大成にとりかかっていたところで病に倒れ、亡くなりました。このため氏の著書は、すべて没後に遺族や後進の研究者らが遺稿をとりまとめたものとなっています。

以下に、主な著書の概要と目次を紹介します。現在でも購入可能なものには価格を記しました。



久保寺逸彦著作集 1

『アイヌ民族の宗教と儀礼』

草風館、2001年/6,800円 (税別)

現在、著作集は第1巻が刊行されています。

第1巻には、日高の沙流地方におけるアイヌの信仰儀礼について書かれた論文が収録されています。巻末には、久保寺氏の研究の全体像について紹介した佐々木利和氏による「解説に代えて 久保寺逸彦—その研究と方法」が収録されています。

アイヌの古俗 酒の醸造及びその祭儀

沙流アイヌの祖霊祭祀

北海道日高国二風谷コタンに於ける家系とパセ・オンカミ「尊貴神礼拝」

北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として—
アイヌの建築儀礼について—沙流アイヌよりの
聴書き—

沙流アイヌのイナウに就いて

解説に代えて 久保寺逸彦—その研究と方法

『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』

岩波書店、1977年/27,184円 (税別)

1960年に学位請求論文として國學院大学に提出された論文で、大きく「対訳篇」「註解篇」「説話篇」から成りたっているうち、「説話篇」のみ割愛して刊行されたものです。「対訳篇」では、久保寺氏自身が採録した計124編の口承文芸が取り上げられています。また、それらについての細かな注釈が「註解篇」に記されています。

自序

『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』概説

対訳篇 I 神謡 KAMUI YUKAR

対訳篇 II 聖伝 OINA

註解篇

『アイヌの文学』

岩波書店、1977年

『東京学芸大学研究報告』第七集別冊（1956年）に掲載された論文「アイヌ文学序説」を収録し、書名を『アイヌの文学』と改めて刊行されたものです。巻末の「解説にかえて」は佐々木利和氏による文章です。

序

- I アイヌ語における雅語と口語
- II アイヌの歌謡
- III アイヌの歌謡の種々相
- IV 巫女の託宣歌
- V 神謡
- VI 聖伝
- VII 英雄詞曲と婦女詞曲
- VIII 散文の物語
- IX アイヌ文学の発生的考察
解説にかえて



『アイヌの昔話』

三弥井書店、1972年

1930年代に沙流地方や千歳の伝承者から久保寺氏が筆録した口承文芸のうち、51編の日本語訳と1編の原文対訳を収録したものです。「あとがき」は久保寺玲子氏（久保寺氏の三女）による文章です。

アイヌの昔話について

神々の昔話

人間の昔話

川下の男と川上の男の昔話

和人の昔話

対訳・解注 Isepo-tono Yaieyukar

あとがき



＜北海道教育委員会による翻刻＞

以下は、いずれも北海道教育委員会の事業として、久保寺氏が遺したノートやカードなどを翻刻したものです。

・北海道教育庁生涯学習部文化課（編）

『久保寺逸彦ノート』

アイヌ民俗文化財調査報告書(口承文芸シリーズ VI～X)

北海道教育委員会、1987～1991年

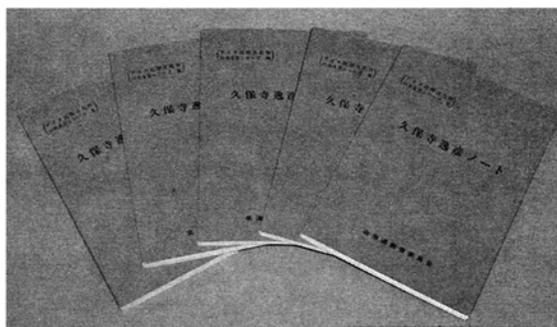
久保寺氏が筆録した口承文芸のノートの翻刻です。対訳や訳注等を付してあります。

・北海道教育庁生涯学習部文化課（編）

『久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿 (平成3年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書)』

北海道教育委員会、1992年

久保寺氏が自身の使用のために手書きで作っていたアイヌ語・日本語辞典のノートの翻刻です。索引等を付してあります。



行事など

● アイヌ文化講座のお知らせ

センターの普及事業の一環として、毎年「アイヌ文化講座」を開催しています。今年度は2月に滝川市で開催する予定です。日時、講師、テーマなどの詳細については、追ってホームページ等でお知らせします。

● 2002 道立試験研究機関「おもしろ祭り」参加

道立の試験研究機関が推進している研究の内容を広く道民に紹介し、その役割について知っていただくため、道立試験研究機関「おもしろ祭り」が毎年開催されています。今年も、昨年に引き続き小樽市の「マイカル小樽」で8月6日に開催されました。

当センターの2度目の出展となる今年度は「アイヌの音楽にふれてみよう」をテーマに、アイヌの楽器について説明したパネルの展示や、来場者へのムックリ（アイヌの口琴）の鳴らし方の指導などを行いました。



<「おもしろ祭り」会場の様子>



<ムックリの鳴らし方を指導する>

センター刊行物のお知らせ

今年度9月までに次の刊行物を発行しました。

- 北海道立アイヌ民族文化研究センター資料目録7『久保寺逸彦文庫 音声・映像資料目録』
- アイヌ文化紹介小冊子『ポン カンピソシ 8 民具』
- 『アイヌ民族文化研究センターだより』17号

平成14年度前半の動き

(4月)

- ・ 西澤勉前副所長転任、羽吹璃美子副所長着任

(6月)

- ・ 資料保存協議会セミナー
(東京都／参加：小川)

(7月)

- ・ 第4回薬用植物に関するワークショップ
(名寄市／参加：貝澤)

(8月)

- ・ 「2002おもしろ祭り」(小樽市／参加)
- ・ 平成14年度第1回運営協議会

(9月)

- ・ 第44回北海道図書館大会
(札幌市／参加：貝澤)

編集・発行 北海道立アイヌ民族文化研究センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5F

Tel.011-272-8801(代) Fax.011-272-8850

開館/月～金 9:00～17:00 休館/土・日・祝日

<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-ambkc/hacrc/hp/index.htm>



古紙配合率100%、白色度70%の再生紙を使用しています。